

老人の意味論と

生の質QOLの寸察（一）



守田 則一

一、はじめに

令和2年の敬老の日を前にして新聞に厚労省の令和2年9月1日現在の百歳老人数が過去最多の8万450人（女性が88・2%）と報じている。ギネスワールドレコーズ社から、存命中の世界一長寿者に田中カ子（カネ）氏（2020年9月19日現在、117歳と261日）が認定されていると報道されていた。確かに日本は長寿国である。

老人とはと問うてみると、その概念は如何なる切り口で如何なる観点からそれを見るかでいろいろである。老人について我々の見

るもの聞くものの中にはすべて個性を含んでおり、その個性の一部の総合されたもの、即ちその総体であると説明がなし得るかも知れないが、それは何も意味しないとも言える。

物理学で気体論を論じるとき、理想気体を前提として論理が展開され単純化された一般式が導き出される気体論の如きものであるなら一応は納得がいくが、老人というものを前提とした仮想の老人は存在しない、しかし老人は存在する、これを議論するにはハイデッガーのいう存在了解の考えを前提とするならばアプローチ出来るかも知れない。

老人とはの問いの考察にはこれらのことをその思考の下敷きとするもの、ここでは心理学や文学の知恵を借りることにする。

二、**神様の下さった動物の寿命のQOL**
グリム童話には、「ロバは神にお願いして30歳の寿命に対して荷役のきつさから18

年減らして貰った、犬は歯の抜けた老犬の生活を嫌い12年返上、猿は子供じみた猿の歳を10年減らして貰った、それで人間にはロバ、犬、猿の減らした歳の総計40年を元来の寿命30年に加え70年の寿命を与えた」とある。

人は人生の後半をこれらの動物のネガティブな側面をもらって、即ち、荷役のきつさ、つまり労働の辛さの18年間、歯の抜けた老いた生活の12年間、年を取って子供じみたレベルの生活の10年間を貰って、それらを寄せ集めて生命の量を増やしても、ネガティブな面のみを貰った長寿では(70歳は当時では長寿であろう)、人の生命・人生・生活の質(QOL:Quality of Life)を総括して筆者は生の質と以下呼ぶ)は低下することは必至であり、斯かる状態では生きる意味がないことを端的に物語っていると見えよう。

Jung は「ペルソナ」⁽¹⁾という概念で人間が他者と接するときの在り方を述べている。即ち、人は社会的に求められる、あるいは期待される役割(道徳的、倫理的に正しく、社会通念的に一般的に正しいこと、よいこととされる役割)を演じようとする機能を持つ生物であると述べている、またその役割とは反対の要素を持つ所謂シャドウの側面もあるという。

人間の心の意識・無意識という二つの領域は、どちらも本当の自分である。従って、この両面は人間のバランスを保つ上にも重要であると見えよう。端的に言えば、ペルソナは無意識の中に存在する人間の社会的な側面のことである。歳を取ればこのバランスが次第に失われていくことは否定出来ない。結果的には、老人は所謂「ペルソナ・ノン・グラタ」(persona non grata、外交上好ましくない人物)として生きなければならぬの

だろか、グリムの童話で神から貰った人の70年の人生の後半は高いQOLを持った人間の生涯を全うする為に頂いた40年であらねばならない。

老化は医学では「加齢に伴う不可逆的(進行性)の生理機能減退」と定義づけられるが、医学の領域からこれを食いちぎって言うなら一面として納得がいくが、単に生理的機能の低下という観点からでは老化の実像には迫れないだろう。以下文献に見る老いの姿を。ペルソナの側面からも追いつながら考えてみる。

三、百歳の小野小町

小野小町は敢えて述べるまでもないが、生没は不明なるも平安前期(9世紀頃)の歌人、歌は柔軟艶麗、比類なき才能に恵まれた人で、仁名・文徳朝の人で絶世の美人として伝説的に伝わっている。

ここで述べるのは若き小町でなく、百歳の

小町である。高齢者の生き様は時代と共に変わり、ある意味で歴史性を持つ、しかし、その特性の本質は変わらないであろう。能に造詣の深い免疫学者多田富雄の『生命の意味論』⁽²⁾の記述の中に、高齢(百歳?)の小野小町の生き様に関連した能の話しが出てくるが、同様な物語は三島由紀夫の戯曲集の中にも同様の小野小町が登場する。筆者はこれを読んだとき、もすこしその意味を理解しようと思つたが如何せん能のことは全くの素人、何処に焦点を合わせて文献検索すべきか皆目見当が付かない、それで九州では能に造詣の深い小生の友人で鹿児島県能協会の会長中西喜彦氏に電話して、いろいろ尋ね文献⁽³⁾も送ってもらつた。それも参考に能に登場する小町を叩きに老人の生き様を考えてみることにする。

能に出てくる小町の像は作者不明の『鸚鵡

の小町』や世阿弥の『関寺小町』、観阿弥作とされる能の『卒都婆小町』のものがあるが、その原典であるとされる『玉造小町子壮衰書』（岩波文庫）の次の詩に老いたる彼女の姿、振る舞いを見ることが出来る。以下その一部を引用し考えを進める。

予（ワレ）

行路の次（ツイデ）

歩道の間

径（ミチ）の辺途（ホトリオオチ）の傍に

一人の女人有り。

容貌かじけて

身体疲瘦せたり。

頭は霜蓬の如く

膚は凍梨に似たり。

骨はそばだち筋抗（アガ）りて

面は黒く齒黄めり。

裸形にして衣無く

はぎにして履（ハキモノ）無し。

声振ひて言うこと能わず

足なえて歩むこと能わず。（略）

かの才媛の小野小町ですらこのように醜く老いていく。これはまさしく老いの姿である。

この詩は老化をリアルに描いている。

しかし、老人のかかる容貌は自然の成り行きとしても、老いたりとは言え問題は小町の精神活動である。その複雑さは、この詩を下敷きにしたと言われる能の『卒塔婆小町』にその詳細を知ることが出来る。この奥深いところは実際にその演じるところを見て感ずるべきものであろうが、そのチャンスがないので、邪道ではあるがその書かれたものから考察をする。

老いた物乞いの姿の彼女が卒都婆に腰かけているのを、高野山の聖が咎めて、彼女との間での卒都婆についての教義問答がおこなわれた。しかし、百歳になっても彼女のかつての才能は、聖をやりこめるだけの能力は未だ残っていた、物乞いの老婆小町は、若き日の才媛のプライドと知性は残されたままであるものの、自分の老いを悟れず、心理学者エリクソン等の言う絶望と統合の狭間⁽¹⁾の中で自己矛盾を起こした老人の末路が如実に示されている。これは現在の行き届いた年金と施設があれば彼女の才能は生かされ、狂乱におとしめることもなく知能の高い百歳老人のあるべき姿として新聞報道されたかも知れない。因みにその救いの役は僧の役ではなく、百一歳になっても未だ矍鑠としていた聖路加病院長の故日野原重明先生のような医師が適任であろう。恐らく今頃、あの世で未だに魂

の彷徨い続けている小町をみて、思いやりの手をさしのべて日野原先生は救済したに違いない。百歳の小町の状態は多田の言う人間社会から隔離して死に至る過程であり、生体の超システムの崩壊過程の観念で説明すべきかも知れない、それをわきまえているのは百歳老人の日野原先生である。また、生体の超システムと老化の意味論については詳しくは多田の原典を参照下さい⁽²⁾。

この老いに関連してシェクスピアの『ハムレット』(第2幕第二場)に次の記述がある。
 ハムレットが本を読みながら舞台上に登場する。ポローニウスがハムレットに向かって「なにをお読みですか」とたずねると、それに対してハムレットが答える場面がある。

悪口だよ、悪口。口の悪い奴がこう書いている。

老人とは、その髭白く、その顔皺だらけにして、目より松脂（マツヤニ）色の液体流し、知能はおびただしく退化し、あわせて膝関節に衰弱を見（ケン）するものなり。

これはたしかにうごかしようのない事実。だがこう書いてしまつてはあまりに失礼ではないかな、おまえだってカニみたいにうしろむきに歩いてみる、おれと同じ年ごろになれるはずだからな。

（小田島雄志 訳）^⑤

とある。ハムレットを通してシェクスピアは老人のイメージを述べるわけだが、所詮人は年と共にこのような変貌をとげる。シェクスピアの老人のイメージは他にもいろいろな観点から興味ある記述がみられるが、東洋人であれ、西洋人であれ、老人は同じ風貌にな

るが、ハムレットでは知能もおびただしく退化している老人としてシェクスピアは記述しているが知能レベルには個体差が甚だしく小町のように詩歌で頭脳を磨いた人には惚けは少なく、また知恵ある老人は小町のように記憶は消えても思考能力は消えないのかも知れない。シェクスピアの『リア王』の中に人間は知恵が付くまでは歳を取つてはいけなと言つ台詞がある（リア王、第一幕、五場）が、逆に知恵が付いた小町は老いる権利はありそうだ。

四、老ゲエテ

ドイツ、フランクフルト出身のドイツを代表する文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832年）は単に文学者としてだけでなくその活動の領域は幅広い、82歳でその生涯を閉じるまでの活躍はどの分野を取り上げても一つの歴史である。ここ

で取り上げるのはそのゲーテは如何に老いていったかの片鱗を考察するにある。ゲーテがファスト第Ⅰ部を書いたのは1806年(55歳)で、第Ⅱ部を書いたのは70代になつてからである。しかも、これを書き終えた翌年に亡くなつてゐる。若きゲーテと老いたるゲーテの対比を知る都合の良い文献がある(6)、その中から要点を引用すると、ゲーテ33歳と78歳の時二度ゲーテに会つた女流作家テレーゼ・フーバーの手紙に次のものが残されている。

先ず、若きゲーテに会つた彼女が父親に送つた手紙には、「彼(ゲーテ)は素晴らしい人です。思ひ上がつてゐるところも、尊大なところもなく、むしろ最初は少し当惑してゐるように見えました。」、人気作家ゲーテ33歳の時の身心共に充実した彼の姿が目に見え、これ以上のことは彼の精力的な作品の全てが

証明してゐるので述べる必要はない。

所が、ゲーテ78歳の印象は「ルイーゼ(テレーゼの娘)はイエーナにゲーテを訪ね、彼の様子を見てすっかり憂鬱になつてしまひました。……(略)……エゴイズムと尊大さが冷たい息を彼に吹きかけて、その精神を麻痺させてしまひ、彼はへつらい屋たちのお世辞に自分をまかせています。……(略)……ゲーテの心はもう死に絶え、いまや荒涼たる幽霊のみが出没してゐるのです。」、このように高齡のゲーテの外観と挙動はネガティブの老人一般と大差はないが、このとき彼はファストの第Ⅱ部を書いており、内面のゲーテとは別人格のようである。このように高齡になると身・精の乖離と更に精・心の乖離が起り、ある意味では二重人格的状态にあると言える。あるいはこれが老いていく人間の自然の姿かも知れないが、ユングのいうペルソナと

シヤドウの關係の危機状態なのである。

ゲーテと小町を対比するに百歳の白髪のやせ細った、よいよいに近い、物乞い老婆の小町は高野山の聖を教義の論戦で言い負かす高い知的能力は未だに残しており、一方ゲーテもファストの第Ⅱ部を書く素晴らしい知的能力は温存されており、二人の知的レベルは高い水準が維持されたままである。しかし、二人ともネガティブの老いを持つ醜い老人にしか過ぎない。割り切れぬものがある。ゲーテのエゴイズムの尊大さは精神の一部の崩壊の兆しであり、結果として身・精・心の乖離を引き起こしている。それは老いの宿命と言わざるを得ない。ゲーテですらこのようである。まして況や我々凡人は老の苦しみを如何に超えていけばいいのであろうか、これが出来ない場合はエリックスの言う老人のアイデンティティにおける絶望の世界をさまようだ

けなのだろうか、これらはQOLの崩壊を意味するものであろう、これを小野小町とゲーテの精神状態が如実に示している。

五、ヘミングウェイの『老人と海』

『老人と海』⑦（1952年）はアメリカのノーベル賞作家ヘミングウェイ（1899～1961）の最後の作品である、文学的価値云々は筆者のよくするところではないが、これに書かれている老人の老人たるところの在り方は、我々医療に携わるものには大変共鳴をうける。ここに少し長くなるが健全な老人の生き方を述べている箇所を二三以下に引用し、それに対する考えを述べる。

「彼は年をとっていた。メキシコ湾流に小舟を浮かべ、ひとりで魚をとって一日をおくっていたが、一匹も取れない日が八十四日もつづいた。」、(略)、「老人の四肢はやせこけ、

項には深い皺が刻み込まれていた。熱帯の海が反射する太陽の熱で、老人の頬には皮膚癌をおもわせる褐色のしみができ、それが顔の両側にずっと下のほうまでひろがっている。両手にはところどころ深い傷跡が見える。綱を操って大魚を捉えるときにできたものだ。が、いずれも新しい傷ではない。(略)。この男に関するかぎり、なにもかも古かった。ただ目だけがちがう。それは海と同じ色をしたえ、不屈な生気をみなぎらせていた」・・・これのうちには、希望と自信とがまだ燃えつきていない。それがいま、風とともに新しく立ちかえってきた (p10)。

・・・いつのまにか自分は人に気がねをするようになったとおもう。同時に、それはなにもかも不名誉なことではない、本当の誇りをいささかも傷つけはしないと考えていた (p10~11)。

・・・故人のぼやけた写真が掛かっていたが(筆者註・先立たれた連れ合いの写真、老人はそれをとりはずしてしまった。見るにたえぬ寂寥の思いに襲われるのを恐れたからだ (p13)。

だれか話し相手がいるというのはどんなに楽しいことかが、はじめてわかった。自身や海に向かつておしゃべりするよりはずっといい。「お前がいなくて寂しかったよ」と老人はいった、(様子を見に来てくれた少年に向かつて・・・筆者註)・・・(p144)

この本の主人公老漁師サンチャゴの来し方と今ある心身の状態を的確にとらえている。ここにはかつて一流の腕を持った、妻に先立たれた孤独の年老いた漁師の失われてないアイデンティティと彼の持つ人生に対するポテンシャルは枯渇することなく健在なのである。

身体はやせこけ老いたとは言え、その未だ衰えぬ不撓不屈の生気はその海の色と同じ青い目の色に集約されている。八十四日間魚が釣れなくとも、自然と共に時間を過ごし、時間の深層に触れる事による彼自身による心のケアなのである。また、働くこと（働けることに）に於いては一生涯現役なのである。ここにも心身の乖離は老いの宿命でもあるが、貧乏暮らしとは言え漁師という天職を通しての高い生の質（QOL）を維持しており、ここに老人のアイデンティティを失わない一人の生き方と自己実現の道が示されている。ここにはポジティブな老人の一つのモデルが示されていると言える。また、それは他人の少年に尊敬される存在でもある、これが老人たるところの本態なのである。これも自然（広大な海）を相手とする老人の一つの生き方でもある。

この本は大変示唆に富み、文学的価値の議論はさておき、高齢（化）社会を迎えた現在に於いてこれは老人の一つのモデルでもあると言える。そこに子供を配することによりその境界線が明瞭になる。かれを慕うよその子供と話している内に、「かれのうちには、希望と自信がまだ燃えつきていない、それがいま、風とともにたちかえてきた。」略「いつのまにか自分は人に気がねするようになったとおもう。同時にそれは不名誉なことではない、本当の誇りをいささかも傷つけはしないと考えていた」。このように老人を支えているものが希望であり、また自信と同時に名誉と誇りに彼の精神的バックグラウンドは維持されている。これは主観的高いQOLを持った老人であると評価出来る。即ち、機能的健康度、日常生活動作能力（ADL, Activity of Daily Life）、認知能力、時間の消費、社会的行為（独創的リ

「ダーシップ」等々は高いレベルにある、それは彼がどでかいカジキマグロを釣り上げた後の彼の行動が証明している。高齢者のQOLに重要である行動能が非常に高いレベルにある典型例である。

ここでこの老人の救いは老人を心の底から尊敬してやまない少年（マノーリン）がいる、彼はまた老人の話し相手である（老人は完全に打ちのめされたことを覚った後にこれを認知する）。老人は海には友達もいれば敵もいるとのべているが、彼の身の回りには話し相手もおれば、かれを何かとサポートしてくれるテラス軒のマスター、頼まれもしないのに老人の船と道具の始末をしてくれたペデリコもいる。また、彼の行方を心配して沿岸警備隊は捜索したし、飛行機も捜索に参加している。社会の一員として生きる彼の人格を認めたと何よりの証である。ただ彼はそれを意識

したかどうかは別の問題である。老人は自然環境の中で生きると同時に社会環境の一員として多くの人に支えられて生きているのである。

しかし、これは文学の世界の一つの理想像かも知れない。前述の物理学の理想気体論から導かれる公式に似ている。現実には、少なくとも日本の高齢社会の現実は多くの問題を抱えていることだけは事実である。

六、オールド・ブラック・ジョウ

Old Black Joe

フォスター (Stephen Collins Foster、

1826～1864) はアメリカ合衆国ペン

シルベニア州ピッツバークローレンスビルの

生まれで、アメリカ合衆国を代表する歌曲作

曲家と言える。作品は黒人歌、農園歌、ラブ

ソングや郷愁歌でそのメロディは日本人の

我々にも親しみやすい。このオールド・ブラ

オールド・ブラック・ジョウ Old Black Joe

Gone are the days when my heart was young and gay,
 Gone are my friends from cotton fields away,
 Gone from the earth to a better land I know,
 I hear their gentle voices calling "Old Black Joe".

(chorus)

I'm coming , I'm coming ,for my head is bending low:
 I hear those gentle voices calling,"Old Black Joe".

若き日 はや夢と過ぎ
 わが友 みな世をさりて
 あの世に 楽しく眠り
 かすかに 我を呼ぶ
 オールド・ブラック・ジョウ
 我也行 (ゆ) かん
 はや 老いたれば
 かすかに 我を呼ぶ
 オールド・ブラック・ジョウ

(緒園涼子 訳)

ック・ジョウ以外に我々に馴染みの深いのは「ケンタキーの我が家」「草競馬」等々を思い出す。とくに、オールド・ブラック・ジョウは戦後のアメリカナイズのはしりとして、昭和20年代の中学校の音楽教科では一つのブームであった。改めてこの曲を三番まで聴いたときオールド・ブラック・ジョウは我々自身であることを悟った。しかし聖書を持たぬ我々には a better land はない。釈迦の涅槃の境地を辿るべきであろうか。そう考える以前にまずその一番を翻訳と共に紹介するので(前ページ)、ロズさんで見てください。

フォスターの活躍した時代は日本では江戸時代、まだ、世界に門戸は開かれていない時代である。日本の人口増加が明治時代に入ってから徐々に問題になる以前のことであり、アメリカでも高齢化社会が問題にならない時

代の Old Black Joe の歌である。従ってまだ長寿化が問題にされず、人口増加も、少子化問題もない時代の老いた人のものと言える。

まだ日本では「人生50年化転の内にならば夢幻の如くなり」、の時代的背景にもつ頃のアメリカの老人の老いの心境の歌である。また、この歌の背景は日本と違い、新大陸に於ける伸び盛りのアメリカの中での「我も行かん、はや老いたれば」の人であり、年齢的比較は出来ぬが、老いの訪れは同じである。ただ背景となる宗教はアメリカはプロテスタントの国である。自ずから a better land は日本のベターランドではない。聖書にいうベターランドである。即ち、宗教的背景をもつ彼等の a better land である、それは一神教の保障する天国であると考えられる。しかし、ここではこのベターランドの議論でなく、老いを如何に捉え、老いを迎えた人の心境がかくあ

ると言うことが問題なのである。ここに見る
 老いたひとはベターランドには友がいる、も
 しや連れ合いも。ここで一番問題なのは

Gone are my friends from cotton fields

away,

である。友はみないなくなってしまうている
 状態で、残された彼は話し相手がいない、最
 悪の場合一人暮らしの状態であることである。
 かかる状態は老人のQOLを著しく損ねる。
 上述の老人と海の場合、話しかける相手に、
 老人を慕う子供がいる。また、子供と一緒に
 仕事をしようという話しは、楽しくもあり、
 一つの生き甲斐でもある。

しかし、ここでは幾分その側面が削がれて
 いる。かすかに我を呼ぶ声は聞こえれど、老
 人としてまだその日その日になさねばならぬ
 ことが山積している筈である。それがプロテ
 スタントなら神に対する奉仕であらうし、神

を持たぬ我々は老人としての生き甲斐の探求
 であろうか。

七、おわりに

筆者は後期高齢者と言われるようになって、自分はどうあらねばならないか、自問自
 答した。先ず高齢者とはどんな人と言うのか、
 その定義は何だろう、単に行政が年取った人
 を何らかの目的で把握する為の便宜的区分か
 らのみ議論しても何ら人間の本質とは関係の
 ないことではないか、その区分の背景には歳
 を取るとはどういうことか、老人とは、老化
 とは、老いとは、といったことの裏付けがな
 くては意味がないと考えた。高齢者は医学の
 領域では老人医学という学問体系があるが、
 過去概念では全て言い尽くすことは出来ず、
 日々書き換えられる運命にある。ここで医学
 以外の先人が如何なる視点からそれを捉え、
 解釈したかに興味を持ち、筆者も改めて資料

を集めた。ここに述べたことはそれらの断片である。これらの資料を通して体系的なものが言えたわけでもなければそんな大それたものをしようと言うのでもない。この論考はほとんど先へ続く。ここでは紙数の関係で一つの区切りとして纏めたに過ぎない。続きはまたの機会に譲りたい。従って、ここには何らの結論はない。

老いて病み、恍惚として人を知らず

(頼山陽、日本外史)

この状態を如何にして余命から少なくし、質の高いQOLを維持するか、それが医学の一つの課題であり使命と思うだけである。最後に卒塔婆小町の文献等数編を送ってくれた中西喜彦博士に感謝する。

(もりた内科・胃腸科クリニック院長)

【参考文献】(必要最小限にとどめた)

- (1) ユング (高橋義孝、森川俊夫、訳) … 心理学的類型Ⅱ、p224、人文書院、1987年
- (2) 多田富雄、生命の意味論…老化―超システムの崩壊 (p165―187)、新潮社
- (3) 広田種三郎・能・謡曲の心、卒塔婆小町、p339―341、1977年(中西喜彦氏私信)
- (4) E. H. エリクソン、J. M. エリクソン(朝長正徳、朝長梨枝子訳) …老年期、みすず書房、2007年
- (5) 小田島雄志…シエクスピアに学ぶ老いの知恵、幻冬社、2003年
- (6) 柴田翔…宇宙の生命―老グーテ (p211―217)、2019年、人文書院
- (7) ヘミングウェイ、老人と海(福田恆存訳)、新潮文庫